論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

甲・乙	氏　名	青山 由紀
学位論文名	Continuous Basal Infusion Versus Programmed Intermittent Bolus for Quadratus Lumborum Block After Laparoscopic Colorectal Surgery: A Randomized-controlled, Double-blind Study	
学位論文審査委員	主　査	和田 耕一郎　印
	副　査	紫藤 治　印
	副　査	平原 典幸　印

論文審査の結果の要旨

腹部手術に際し硬膜外鎮痛法に代わり、より安全な末梢神経ブロックが普及し、カテーテルを留置した局所麻酔薬定流量持続投与法から、近年は間歇的ボーラス投与法が注目されている。ボーラス投与法は持続投与より広範囲で優れた鎮痛効果が得られることが示されおり、申請者は、体幹部筋膜面ブロックの一つである腰方形筋ブロックの局所麻酔薬投与法に関する前向き無作為化比較研究を行った。局所麻酔薬のボーラス投与法が持続投与法に鎮痛効果において優ると仮定し、５０症例の腹腔鏡下直腸結腸手術患者を対象に腰方形筋ブロックにおける投与法の鎮痛効果について比較検討した。結果として、主要評価項目である術後の麻
薬使用量、副次評価項目の疼痛スコア、鎮痛剤使用量、知覚遮断域ともに有意な差を認めず、当初の仮説である持続腰方形筋ブロックにおけるボーラス投与法の優位性を示すことはできなかった。ただし、本研究結果は間歇的ボーラス投与法を否定するものではなく、投与条件により有効な鎮痛効果が得られる可能性も示唆していた。申請者が本研究を含めて実施してきた末梢神経ブロックに関する一連の臨床研究の紹介もあり、本申請研究が多くの外科系診療科の手術において周術期疼痛管理の発展に貢献すると考えられた。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者がこれまで実施してきた末梢神経ブロックに研究を活かして発案されたRCTで、残念ながらポジティヴな結果は得られなかったが、従来法と比較して差がなかった、という結果は重要である。課題としてサンプルサイズ、ランダム化の階層化を挙げた。更にこの結果を受けた今後の研究計画に関する提示もあり、今回の臨床研究はもちろんのこと、局所麻酔を中心とした麻酔科学に関する能力が学位授与に値する十分なレベルであることを確認した。また、予備審査から本審査まで、資料の準備やプレゼンテーションについても高いレベルであると感じられた。

（主査　和田耕一郎）

申請者はより安全な局所麻酔として注目されている腰方形筋ブロックに関し、有効な局所麻酔薬の投与方法を検討した。予想に反し、持続的投与と間欠的なボーラス投与で鎮痛作用などに差は無かったが、これら結果は臨床的に重要な知見となっている。公開審査時の質疑応答も適切で、関連知識も十分であり学位授与に値すると判定した

（副査　紫藤 治）

申請者は腹腔鏡下結腸直腸手術における従来の硬膜外麻酔による鎮痛法に変わる腰方形筋ブロックの有用性を前向き無作為比較臨床試験にて検証した。結果的には有用性を示すことは出来なかったが、これまでに申請者が論文発表した結果を基に仮説を立てて臨床試験を行い、今後の研究課題も明確に提示していることから博士の学位授与に値すると判断した。

（副査　平原 典幸）

（備考）要旨は、それぞれ４００字程度とする。